教育センター通信

火床（ほど）の火の心を紡ぐ

第９号（通算５９号）
平成３１年１月３０日
三条市小中一貫教育推進課
教育センター　発行

しただの郷学園（下田中）
乗り入れ授業　美術
１月 21 日(月)

「考え、議論する道徳」の充実に向けて

小中一貫教育推進課　指導主事　青木　利恵子

10 年以上前のことです。道徳の研究授業をすることになり、「絵はがきと切手」という話をヒントにした自作資料を提示して、５年生の道徳授業を行いました。授業自体は反省点が多々あり、もう少し一人一人が自分の考えを話すことのできる場をつくれば良かったと思っています。その中で、今でもよく覚えていることが一つあります。それは、授業直後、A子さんが私のところに駆け寄ってきて言った言葉です。「先生、今日の授業、すごく面白かった！」A子さんは、普段興に乗ると発言をするのですが、この授業では、発言は全くありませんでした。A子さんには響かなかったのかと思っていたくらいでしたので、とても嬉しかったです。A子さんは、仲間の様々な発言を聞くことを通して、「どうすることが本当に良いのか」と一生懸命に考えていた、その思考そのものが、とても楽しかったのではないでしょうか。

前文部科学省教科調査官の赤堀博行先生は「『考え、議論する道徳』の議論は討論ではない。討論とは議論をたたかわせることである。議論とは、様々な考え方、感じ方に出会って自分自身の考え方を深めることである。」と、ある寄稿文に書いています。

道徳の授業の話合いが活発であることは良いことなのですが、静かに思考をしている時間もとても大切です。聴くということ、自分自身はどうあるべきかじっくりと考えることを意識し、「考え、議論する道徳」が、三条市内の各学校でますます充実することを願っています。

プログラミング教育研修会

1月15日（火）

新潟市立総合教育センター指導主事 山本政義様を講師にお迎えし、裏館小学校を会場に開催しました。プログラミング教育が導入された背景についての説明の後、「プログラミング的思考」とは何か（図１）について、そして、その「プログラミング的思考」を育てる３つの方法（図２）について教えていただきました。

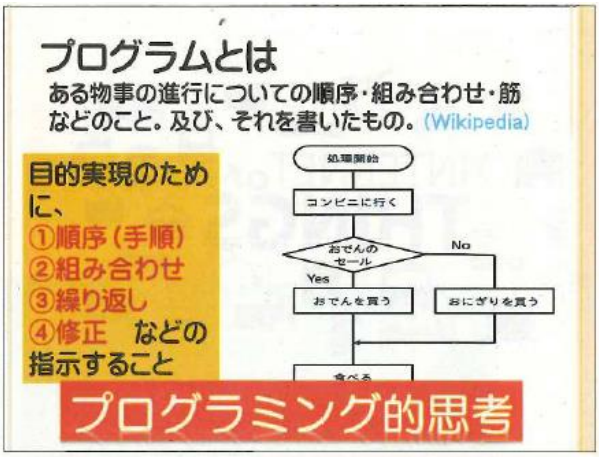

図１

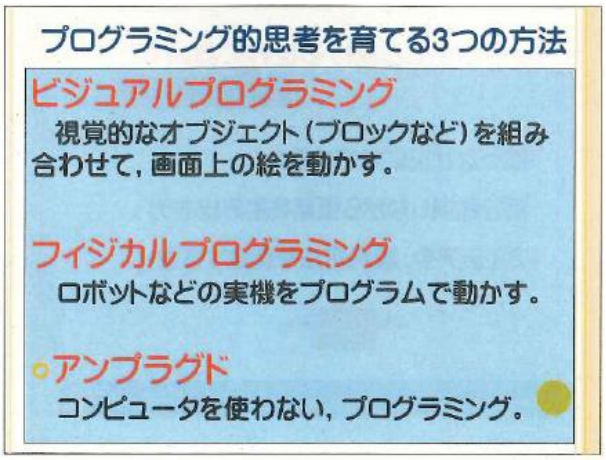

図２

１つ目の「ビジュアルプログラミング」は動かすものが“アニメ”であり（図３）、２つ目の「フィジカルプログラミング」はそれがロボットである（写真１）ということ。そして３つ目の「アンプラグド」というのはコンピュータを使わない学習で、例えば作業手順を板書したり（図４）、簡単にするにはどうしたらいいかを考えたりすること（図５）であり、多くの教科で取り入れられるものであるということを学びました。

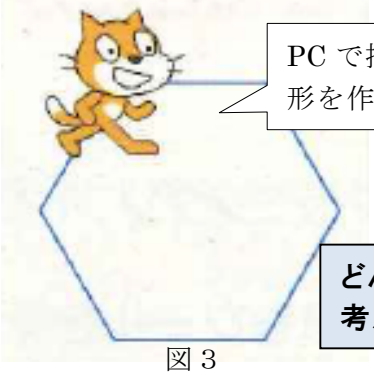

図３

写真１

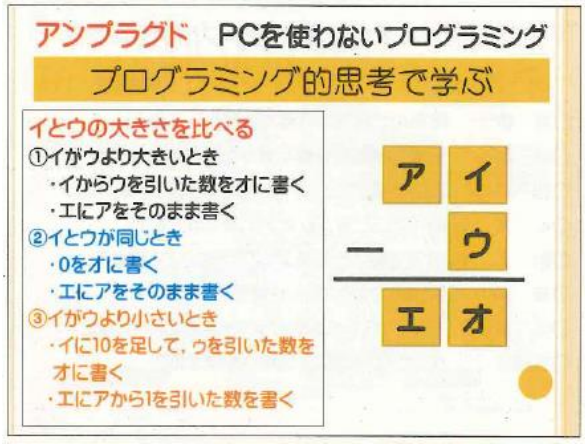

図４

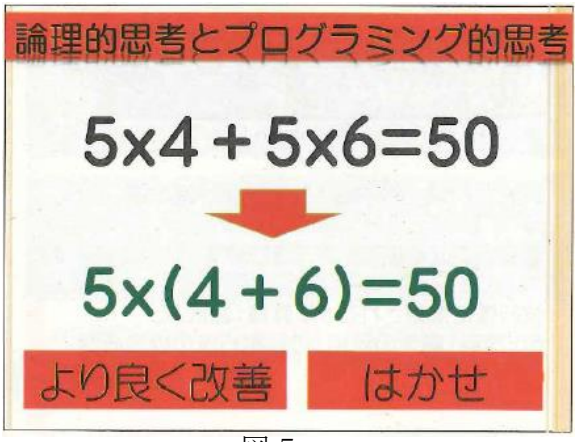

図５

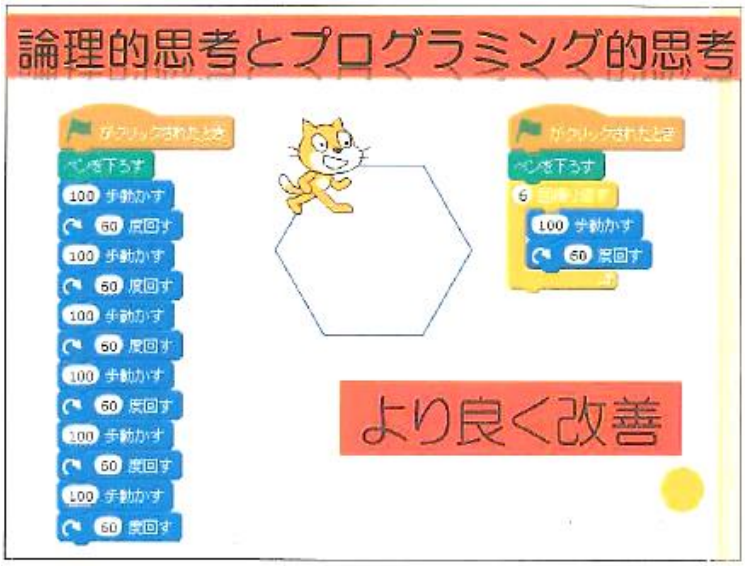

図６

図６は「スクラッチ」という無料アプリで、ネット上からダウンロードができます。情報管理課の許可を得て、小学校及び大崎学園でインストール可能です。ぜひお試しいただき、子どもたちの学習にどのように取り込めるかを御一考ください。

画面中央のネコに対する動きの指示が画面左に並んでいます。ここには同じ動きが６回連続しているので、“６

＜受講者の感想＞

・プログラミング教育＝パソコンを使って操作するとずっと思っていました。しかし、キャリア教育と同じように「普段やっていることの見方を変える」ということが第一歩だと知りました。
・子どもと一緒にやってみたいと思えました。自分が体験してみることは大切だと思いながらも、なかなかその機会がもてずにいました。今回がその良いきっかけになり非常に有意義でした。
・様々な教科でプログラミング的思考ができるように授業改善しようと思います。
・「プログラミング的思考とはなに？」と思っていたので、今日のお話を聞いて少しほっとしました。担当している５年生で、挑戦してみたいと思います。

学園の取組紹介　一ノ木戸ポプラ学園

第４回小中合同研修会　1/16

一ノ木戸ポプラ学園では、今年度からグランドデザインを一新し、各部会の小中一貫教育の取組を見直しながら取り組んできました。

今回の研修会では、一年間の取組を振り返り、残り２ヶ月の取組や次年度の取組の方向について話し合われました。部会ごとに建設的な意見や様々なアイディアが出され、有意義な研修会となっていました。子どもたちのために一生懸命考える先生方の様子が印象に残りました。

さわやかあいさつ運動　1/15～18

今年度、３回目のあいさつ運動でした。

寒い日にもかかわらず、小中学校それぞれの担当の子どもたちが元気に声を出し、あいさつを呼び掛けていました。

帰国・外国人児童生徒の日本語指導について

小中一貫教育推進課　統括指導主事　熊倉　隆司

外国人児童生徒の日本語指導について全国的に注目されるようになってきています。三条市内では、現在、日本語指導が必要な帰国・外国人児童生徒は４人です（「平成 30 年度　日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」より）。在籍校４校では、当該児童生徒が学校生活に適応し、日本語が理解できるように、管理職、学級担任・教科担任の先生を中心に力を尽くしてくださっています。

その支援のために、三条市では、今年度、「日本語指導支援員」を嘱託で採用しました。陳惠萍（チンケイヘイ）さんです。陳さんは、台湾出身の女性で、来日後、大学等で日本語や日本の生活習慣を苦労して習得された経験があり、外国人の子どもたちを支援したいという気持ちの強い方です。現在、嵐南小と第一中で日本語指導、学習支援・学校生活支援を行っているほか、時々、一ノ木戸小を訪問し、当該児童との面談も行っています。通訳として、学校と保護者との懸け橋にもなり、両者からの信頼を得ています。また、日本語指導・学校生活支援のためのプログラムを指導主事と一緒に作成中です。

一方、一ノ木戸小と裏館小では、それぞれ母国語が分かる方にスクールアシスタントになっていただき、週に数時間の日本語指導を当該児童に行っています。

三条市教育委員会では、これらの同じような環境にある児童生徒が交流したり合同で学習したりすることで、気持ちを落ち着かせたり学習や生活への意欲を高めたりすることにつなげてほしいと考え、月に１回、「帰国・外国人児童生徒交流・合同学習会」を嵐南小で行っています。陳さんと地域経営課所属の国際交流員：ショーン・ワンさんが活動をリードし、楽しいひとときを過ごしています。子どもたちは、次の会を楽しみにしてくれるようになってきました。そして、何よりも、年度始めと比べて、会の中で聞かれる日本語が増えたり上手になったりしていることをうれしく思っています。

教職員の皆様の当該児童生徒への丁寧な指導・支援を引き続きよろしくお願いいたします。

三条市新春小・中学校書初展を開催

市民の書写教育に対する関心を高め、児童生徒の書写技能の向上を図ることを目的に、１月 19 日（土）・20 日（日）・21 日（月）の３日間、市役所栄庁舎３階教育センターで開催しました。844 点の出品をいただき、2340 人の方がご来場くださいました。

家族で来場し、称賛の言葉を掛けてもらったり、自分の作品を背にして写真を撮ってもらったりしてうれしそうにしている子どもの姿がたくさん見られました。「みんな上手ですね。」などと感想を聞かせてくださる方も多数いらっしゃいました。「賞があって励みになる。」という声もいただいています（新潟県書道教育研究会理事の３名の先生から審査をしていただき、出品作品の２割を金賞に、３割を銀賞に、５割を銅賞に選んでいただいています）。市民の書初展に対する関心の高さを改めて感じました。

この書初展は、合併前の旧三条市の時代から長く行われてきたもので、合併の後、三条市教育委員会主催、三条市新春小・中学校書初展実行委員会主管の現在の形で運営されるようになりました。旧体育文化センターの閉鎖・解体のため平成 27 年度から教育センターでの開催となっています。

各校の実行委員、作業協力の先生方のお力で開催することができています。今年度も事前に、作品搬入、審査、賞紙（金・銀・銅）貼り、台紙への作品貼り、展示等の作業を、事後には、台紙外し、作品の切り分け、会場復元等の多くの作業にご協力いただきました。ありがとうございました。

２月９日（土）・10 日（日）に同じく栄庁舎教育センターで開催する「三条市幼・小・中美術展」にも、ご協力をよろしくお願いいたします。

（書初展担当：小中一貫教育推進課　熊倉）